様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０１１７２

研究課題名（和文）アメリカ西部の砂糖と移民―近代化のグローバル地誌学に基づく再検討―

研究課題名（英文）Sugar and immigrants in the American west: Reexamination on the basis of the global regional geography of modernization

研究代表者
矢ケ崎　典隆（YAGASAKI, Noritaka）

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：３０１６６４７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、19世紀後半から20世紀初頭にかけての近代化の時代に展開した地域変化を、人・資本・技術・物・情報のグローバルな移動と越境に着目して明らかにすることを目的として、アメリカ西部におけるテンサイ糖産業ついて検討した。主な製糖地域であるコロラド州、カリフォルニア州、ユタ州、アイダホ州を対象として、灌漑事業、テンサイ栽培、資本や技術の導入について明らかにするとともに、日本人、ロシア系ドイツ人、メキシコ人、モルモン教徒が果たした役割について考察した。こうした作業を通して、アメリカ西部のテンサイ糖産業をサトウキビ糖を含めたグローバルな枠組みに位置づける必要性が明確になった。

研究成果の概要（英文）：This study attempted to clarify the regional changes that took place in the age of modernization from the late nineteenth century through the early twentieth century by focusing on the American West where the beet sugar industry played an important role in transforming regions. Case studies were conducted in Colorado, California, Utah and Idaho. Special atttention was paied to irrigation projects, sugar beet production, and the introduciton of capital and technology, while the role of Japanese, Mexicans, Germans from Russia and the Mormons was scrutinized. It is suggested that the beet sugar industry in the American West needs to be understood in the global system of sugar production.

研究分野：geography

キーワード：地誌学　アメリカ西部　砂糖　テンサイ　移民　近代化

１．研究開始当初の背景

世界の諸地域を正確に認識するための方法を提示することは、地理学が学術研究の世界および一般社会において果たすべき役割の一つである。そのために、対象地域を設定して、地域変化をダイナミックに描写し、地域変化のメカニズムをグローバルな枠組みに照らして説明するという事例研究を蓄積することが必要となる。これがグローバル地誌学である。

19 世紀後半から 20 世紀初めにかけての近代化の時代に、世界はどのように変化したのだろうか。この課題に関する研究の蓄積は不十分なままである。世界各地の地域変化を、近代化のグローバル地誌学の枠組みにおいて再検討することは、地理学に課せられた現代的課題である。

アメリカ西部は、19 世紀後半から 20 世紀初めにかけてダイナミックな地域変化を経験した。アメリカ西部はさまざまな学術分野の関心を集め、地域変化に関するさまざまな解釈が提示された。歴史家の F. J. Turner はフロンティア学説を唱えたが、発展段階論による説明は経済決定論であった。歴史家の W. P. Webb の『大平原』は古典的な著作として知られるが、乾燥という自然条件による説明は環境決定論の域を出なかった。

その後、アメリカ西部史では水資源と灌漑におもな関心が払われた。ピサニ（Pisani, D. J.: *To Reclaim a Divided West*, Univ. of New Mexico Press）やハンドリー（Hundley, Jr. N.: *The Great Thirst*, Univ. of California Press）が代表例である。これらは乾燥した環境を克服した結果としての地域変化を論じた。このような研究によって確かにアメリカ西部の地域性の一面は明らかになったが、地域変化とそのメカニズムは十分に説明されてはいない。

地理学研究者は、移動と越境に着目することにより、アメリカ西部をダイナミックに描く。例えば、Meinig はモルモン教会の西部への移動とモルモン文化地域の形成を論じた（Meinig, D. W. 1965. The Mormon cultural region: Strategies and patterns in the geography of the American West, 1847-1964. *Annals of the Association of American Geographers*, 55: 191-220）。Jordan は旧大陸から導入された牧畜の伝統の伝播に注目し、アメリカ西部の牧畜フロンティアを明らかにした（Jordan, T. G.: *North American Cattle-Ranching Frontiers*, Univ. of New Mexico Press）。すなわち、移動と越境に着目することにより、アメリカ西部の地域変化が明らかになる。

近代化の時代にはグローバルな人間の移動と越境が活発になった。ヨーロッパからアメリカへ、またアジアからアメリカへ、多くの人々が移動した。同時に、資本や技術の移動も活発化した。その結果、新しい産業が展開し、地域変化が促進された。

典型的な事例は、人間の甘さに対する欲求を満たしてくれる砂糖の生産、すなわち砂糖産業である。熱帯では、ブラジル北東部、西インド諸島、ハワイなどで、サトウキビを原料とする砂糖産業の近代化が進んだ。温帯では、ヨーロッパでテンサイを原料とする砂糖産業が発展し、それはアメリカに導入されて、アメリカ西部に新しいテンサイ糖地帯が形成された。これは新たな人口移動を引き起こした。砂糖は、近代化にともなう地域変化を理解するための重要な研究対象である。

２．研究の目的

従来、アメリカ西部は、近代化のグローバル地誌学の枠組みに即して検討されることはなかった。そこで本研究は、アメリカ西部の地域変化を論じる際に鍵となる移民と砂糖に着目することにより、西部の発展を再検討することを目的とした。地理学は、さまざまな地域スケールを設定し、多様な資料を用いて地域変化を研究する学問であり、アメリカ西部を現実の地域に即して読み解くことに貢献できる。

本研究では、近代化のグローバル地誌学の枠組みを提示し、アメリカ西部におけるテンサイを原料とする砂糖産業の展開を、資本と技術の導入の視点から明らかにするとともに、日本人移民、ロシア系ドイツ人移民、モルモン教徒、メキシコ人労働者に着目し、地域変化に果たす移民の役割を明らかにする。そして、砂糖と移民に基づいてメリカ西部の地域変化のメカニズムを論じる。さらに、アメリカ西部におけるテンサイ糖産業に関する新たな知見は、グローバリゼーションを論じるための事例を提供することができる。

３．研究の方法

本研究では 6 つのステップで研究を遂行した。すなわち、①近代化のグローバル地誌学という考察の枠組みの構築、②アメリカ西部における砂糖産業の展開に関する検討と時期区分の設定、③カリフォルニア州におけるテンサイ糖産業の展開と日本人移民の役割に関する検討、④コロラドを含めた西部諸州におけるロシア系ドイツ人移民の流入とテンサイ栽培に関する検討、⑤ユタ州とアイダホ州におけるテンサイ糖産業におけるモルモン教会とモルモン教徒の役割に関する検討、⑥以上の検討の結果に基づいたアメリカ西部の地域変化に関する考察。テンサイ糖産業をグローバル地誌学の枠組みに即して検討するために、4 つの要素、すなわち資本、製糖工場、原料供給、労働力に着目した。

関連する既存研究や文書資料は多岐にわたるので、文献の所在を確認し、資料収集を行った。ロシア系ドイツ人については、ロシア系ドイツ人アメリカ歴史協会（ネブラスカ州リンカーン）とロシア系ドイツ人文化継承協会（ノースダコタ州ビスマーク）、日本人移民についてはカリフォルニア大学ロサン

ゼルス校研究図書館の Japanese American Research Project Collection で資料を閲覧した。また、地域の情報や砂糖産業に関する文献資料については、コロラド州、ユタ州、カリフォルニア州で資料収集を行った。主な図書館は、コロラド州立図書館、デンバー中央図書館、コロラド州立大学図書館、カリフォルニア大学バークリー校図書館、カリフォルニア大学ロサンゼルス校図書館、カリフォルニア州立大学チコ校図書館、ユタ大学図書館、ユタ州立大学図書館などである。そのほか、ローカルな博物館や郡立図書館・資料館を訪問して関係する資料を収集した。

また、テンサイ糖産業地域を現地調査し、砂糖産業の遺構を確認した。アメリカ西部には操業を継続するテンサイ糖工場も若干あるが、多くは解体されたほか、廃墟となって残っているものもある。産業遺跡としてのテンサイ糖産業についても考察した。

４．研究成果

アメリカ合衆国におけるテンサイ糖産業の展開は、①ヨーロッパからのテンサイ糖産業の導入（1830～1887 年）、②研究開発の進展（1888～1897 年）、③アメリカ型テンサイ糖産業の確立（1898～1913 年）、④テンサイ糖産業の不安定化（1914～1933 年）、⑤連邦政府による保護安定政策（1934～1974 年）、⑥テンサイ糖産業の衰退（1975 年以降）に区分することができる。アメリカ合衆国では、温帯の作物であるテンサイは南部を除く広域な地域で栽培が可能であるが、中西部の農業地域ではトウモロコシとの競合によって、テンサイに対する関心は低かった。そのため、テンサイ糖産業は主に西部で展開した。アメリカ西部では 19 世紀末に灌漑に基づくテンサイ栽培が活発化し、各地に製糖工場が建設された。1910 年代後半にはアメリカ西部に合計 65 か所の製糖工場が存在したが、3 つの集積地域が認められた。すなわち、コロラド州東部（サウスプラット川流域とアーカンザス川流域）、ユタ州北部からアイダホ州南部にかけての地域、そしてカリフォルニア州であった。それぞれの地域では、資本、製糖工場、原料調達、労働力において、テンサイ糖産業に明瞭な地域性が認められた。

コロラド州では、19 世紀末に始まった灌漑事業を基盤として、20 世紀に入ってテンサイ糖産業が急速に発展し、20 か所のテンサイ糖工場が建設された。こうしてコロラド州はアメリカ最大のテンサイ糖生産州となった。その背景には、ドイツ人移民の役割と、ロッキー山脈における鉱業の発展で蓄積された地元資本の存在が重要であった。特にドイツ人移民 Charles Boettcher は地元を代表する実業家で、テンサイ糖事業に投資したことで知られる。ニューヨークに本拠を置いた American Sugar Refining Company もアメリカ西部のテンサイ糖産業に関心を示した。こうして、サウスプラット川流域では、Great Western Sugar Company が 13 か所の製糖工場を経営した。原料を調達するために、地元農民との間に栽培契約が結ばれた。ロシア系ドイツ人は当初は農業労働者としてこの地域に流入したが、間もなく農地を取得してテンサイ契約栽培者となり、原料の供給に重要な役割を演じた。一方、日本人移民は季節移動労働者としてテンサイ労働に従事した。

ユタ州とアイダホ州ではモルモン教会がテンサイ糖産業の発展に主導的な役割を演じた。早くも 1850 年代にはテンサイ種子とイギリス製機械を輸入して製糖が試みられたが、この初期の事業は失敗した。テンサイ糖産業が軌道に乗ったのは 1900 年代に入ってからで、Amalgamated Sugar Company と Utah-Idaho Sugar Company が設立された。これらの会社の経営にはモルモン教会とモルモン教信者が中心的な役割を演じた。製糖工場の分布を見ると、Amalgamated Sugar Company の製糖工場は、ユタ州北部、アイダホ州南部・西部のスネーク川流域に、Utah-Idaho Sugar company の製糖工場は、ソルトレークシティの南の地域、同市の北からアイダホ州境にかけて、また、アイダホ州東部のスネーク川流域に立地した。製糖工場は地元の農業者と栽培契約を結んでテンサイを調達した。農業者はモルモン教信者の小規模な家族農場で、子どもの数が多いので労働力に恵まれた。一方、19 世紀後半に鉄道や鉱山の労働者としてこの地域に流入した日本人は、間もなくテンサイ労働に従事するようになった。製糖工場が積極的にテンサイ栽培を奨励した結果、借地や土地購入によってテンサイ栽培に従事する日本人が増加した。こうしてユタ州北部のテンサイ糖生産地域には日系移民社会が形成され、日本人会や日系農業組合が組織された。テンサイ供給量が製糖工場の存続に重要な意味を持ったため、日本人農民は重要な存在であり、モルモン農家や製糖工場と良好な関係が維持された。

カリフォルニア州の場合には、多様な資本によってテンサイ糖工場が建設されたが、中心的な役割を演じたのは、ドイツ人移民 Claus Spreckels と、フランス人移民 Henry Oxnard と彼の兄弟たちであった。Spreckels の両親はハノーバー近郊の小農民で、6 人兄弟の長男 Claus は 18 歳で渡米し、チャールストンで食料品店を経営して成功した。サンフランシスコに移転して食料品店を経営するとともに、ビール醸造に従事した。さらに、Bay Sugar Refinery を経営して砂糖精製事業を開始した。原料糖を確保するためにハワイに進出し、マウイ島でサトウキビプランテーションを経営して砂糖王 Sugar King として知られるようになった。サンフランシスコに戻った後、Western Sugar Beet Company を設立して、1888 年にワトソンビルにテンサイ糖工場を開設した。さらに、近接するサリナスバレーに Spreckels Sugar Company を建設して 1899 年に操業を開始した。カン

パニータウンのスプレックルズはサリナスバレーの経済発展の中核をなした。

フランス系アメリカ人の両親をもつ Henry Oxnard は、1861 年にフランスのマルセイユで生まれた。彼と 3 人の兄弟は Oxnard 兄弟として知られ、American Beet Sugar Company（American Crystal Sugar Company に社名変更）を経営して、アメリカの製糖業において重要な役割を演じた。砂糖精製事業に携わった父親の影響を受けて、Oxnard はフランスにもどってテンサイ糖技術を学んだ。最初の製糖事業はネブラスカで始まり、南カリフォルニアでは 1890 年に Chino Valley Beet Sugar Company を組織して、翌年に製糖を開始した。さらに、ヴェンチュラ郡のオックスナードの街は 1898 年に建設され、1899 年 8 月には Oxnard Sugar Company の製糖工場が完成した。この工場は 1959 年 10 月の閉鎖まで操業を続けた。

以上の 3 つのテンサイ糖生産地域について、資本、製糖工場、原料調達、労働力に着目することによって、近代化の時代におけるそれぞれの地域性が明らかになった。それらを踏まえて、アメリカ西部の開発の動向を明らかにすることができた。なお、旧テンサイ糖地域には、製糖工場の廃墟があり、アメリカ西部で 20 世紀前半に繁栄したテンサイ糖産業の名残をとどめている。廃墟となった製糖工場の分布や景観は、アメリカ西部の発展を今に伝える産業遺跡である。これは本研究の計画段階では予想していなかった新しい知見である。研究成果の一部はすでに公表したが、継続して論文や書籍を刊行していく予定である。また、アメリカ西部のテンサイ糖産業は、グローバルな砂糖の地理学の枠組みに即して検討することにより、砂糖をめぐるグローバリゼーションが明らかになる。アメリカ南部やハワイのサトウキビ糖産業、西インド諸島やブラジル北東部のサトウキビ糖産業、ヨーロッパのテンサイ糖産業を含めたグローバルな枠組みにおいて、アメリカ西部のテンサイ糖産業を位置付ける検討も必要となる。これは今後の課題である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 矢ケ崎 典隆、製糖工場の廃墟―アメリカ西部で繁栄したテンサイ糖産業の記憶―、E-journal GEO、査読無、12、2017、294－300
DOI: 10.4157/ejgeo.12.294

〔学会発表〕（計 5 件）

① 矢ケ崎 典隆、アメリカ合衆国ユタ州・アイダホ州におけるテンサイ糖産業と移民、第 61 回歴史地理学会大会・総会、2018 年、秋田大学

② 矢ケ崎 典隆、カリフォルニアにおけるテンサイ糖産業と移民―スプレックルズとオックスナードに着目して―、日本地理学会秋季学術大会、2017 年、三重大学

③ 矢ケ崎 典隆、甘さの地域構造を探る―砂糖をめぐるグローバリゼーションとローカリゼーション、地理空間学会第 10 回大会、会長講演、2017 年、筑波大学東京キャンパス

④ 矢ケ崎 典隆、アメリカ合衆国コロラド州のプラット川流域におけるテンサイ糖産業、第 60 回歴史地理学会大会・総会、2017 年、愛知教育大学

⑤ 矢ケ崎 典隆、近代化のグローバル地誌学からみたアメリカ西部の砂糖産業、日本地理学会春季学術大会、2016 年、早稲田大学

〔図書〕（計 5 件）

① 矢ケ崎 典隆編、矢ケ崎 典隆、大石 太郎、根田 克彦、高橋 昂輝、山根 拓、石井 久生、加賀美 雅弘、山下 清海、浦部 浩之 著、学文社、移民社会アメリカの記憶と継承―移民博物館で読み解く世界の博物館アメリカ―、2018、308（1－35、95－127、162－185、(1)－(11)）

② 矢ケ崎 典隆、山下 清海、加賀美 雅弘編、矢ケ崎 典隆、山下 清海、加賀美 雅弘、兼子 純、箸本 健二、小田 宏信、高柳 長直、岩間 信之、呉羽 正昭、松井 圭介著、朝倉書店、グローバリゼーション―縮小する世界―、2018、142（1－12、123－133）

③ 矢ケ崎 典隆、菊地 俊夫、丸山 浩明編、大石 太郎、福本 拓、杉本 興運、飯塚 遼、菊地 俊夫、矢ケ崎 典隆、市川 康夫、丸山 浩明、伊藤 貴啓、カウクルアムアン アムナー、大山 修一 著、朝倉書店、ローカリゼーション―地域へのこだわり―、2018、139（65－75）

④ 日本大学文理学部編、永井 均、古川 隆久、佐藤 至子、三澤 真美恵、マイルズ チルトン、初見 基、久保田 裕之、金子 絵里乃、広田 照幸、青山 清英、菊島 勝也、矢ケ崎 典隆、安井 真也、市原 一裕、尾崎 知伸、十代 健、間瀬 啓介、大崎 愛弓著、筑摩書房、知のスクランブル―文理的思考の挑戦、2017、286（179－191）

⑤ 山下 清海編、荒又 美陽、大石 太郎、加賀美 雅弘、根田 克彦、福本 拓、矢ケ崎 典隆、吉田 道代 著、明石書店、世界と日本のエスニック集団とホスト社会―日本社会の多文化化に向けたエスニック・コンフリクト研究―、2016、332（53－58、149－174）

６．研究組織

(1)研究代表者

日本大学・文理学部・教授
矢ケ崎　典隆（YAGASAKI, Noritaka）
研究者番号：３０１６６４７５